

## 2014 年度第 1 回地域会議議事概要

2014 年 11 月 10 日（月）、青森市内において地域会議を開催しました。

当会議は、私ども日本原燃㈱が地域の皆さまから信頼していただける企業となることを目指し、弊社経営層が直接地域の皆さまのご意見やご指摘などをお伺いして、事業活動に活かしていくことを目的に開催しているものです。

### 【委員（五十音順）】

芦野 英子	様	エッセイスト
井口 泰孝	様	東北大学名誉教授・弘前大学学長特別補佐
上長根 浅吉	様	六ヶ所村商工会会長（浅工務店社長）
菊池 としえ	様	六ヶ所村保健協力員協議会会長
北村 真夕美	様	㈱青森経営研究所代表取締役社長
小林 昭男	様	上十三法人会六ヶ所村支部副支部長
武輪 俊彦	様	武輪水産㈱代表取締役社長

### 【会議風景】



### 【議 題】

「再処理工場しゅん工時期変更に伴う県民の皆さまのご理解獲得および新規制基準への対応状況のご報告について」

### 【議 事】

#### ◆弊社社長の挨拶概要

日本原燃の工藤でございます。

私は 6 月 30 日に前社長の川井から引き継ぎまして、社長に就任いたしました。新しい立場になって初めてお目にかかります。改めまして、本日はお忙しい中、地域会議の委員の皆さま方におかれましては、貴重なお時間

を賜り、誠にありがとうございます。また、日頃より当社事業に格別のご理解と、ご指導を賜り、重ねて御礼申し上げます。

私、青森に参りまして丸5年になりますが、ずっと広報・地域交流関係の仕事に携わって参りました。地域会議の委員の皆さまのご指摘、ご意見をしっかり受け止めることが大変重要であると認識しております。今日も私を初めとして経営陣が揃って、皆さまのご意見を経営に活かすべく、様々なご指摘を受け止めて経営に反映していければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

後ほど詳しくご説明させていただきますが、再処理工場のしゅん工時期の変更について、私からもお話いたします。先月30日に青森県と六ヶ所村にご報告し公表させていただきました。従来のしゅん工時期につきましては本年10月としておりましたが、これを1年5ヶ月延期し2016年3月に変更することを公表させていただきました。これは、そもそも今年1月に弊社施設について、新規制基準への適合性に関する審査を申請したのですが、当時は、原子力発電所も同じく、審査期間は6ヶ月あれば大丈夫だろうという見方でした。実際に審査が開始されますと原子力発電所同様に想像以上に厳しいご指摘、更なる検討を規制当局から求められました。規制当局のご判断ということで、しっかり受け止めてまいったところではありますがご指摘が多岐にわたり時間がかかっております。今後どのくらいかかるのか、審査の状況や安全を高めるための工事などを見通し、最大限の努力をして、速やかな審査をお願いする前提で1年5ヶ月延期とさせていただきました。

引き続き新規制基準対応は全社をあげて、全力をつくして頑張っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

また、これまで再処理工場のしゅん工時期が延びてきた原因として、ガラス固化施設のトラブルがありましたが、いろいろな技術的なトラブルを乗り越え昨年5月に終了しております。

これにより再処理工場のしゅん工に向けた技術は確立できたものと考えております。今回の延期は地域の皆さまの安全・安心という観点から新しい安全を作り上げていく時間と考えております。

本日は、様々な視点からのご意見やご指摘を賜りたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

#### ◆質疑応答

(委員) それでは、委員の皆さま方から、3つの観点、一つ再処理工場しゅん工時期変更に対する県民の皆さまの受け止め、二つ新規制基準への日本原燃の対応に関するご意見・ご要望、三つ日本原燃のコミュニケーション（情報公開・理解獲得活動）のあり方に対するご意見といった観点から、忌憚のないご意見、ご提言をいただきたいと思っております。三つに特別区切らなくても、それぞれのところで発言いただいで結構です。

- (委員) 一般の人は何か延期になったら、直ぐに何かあったのかと思ってしまいます。なぜ延期になったのかきちんと説明しないと納得しない。誤解のないように私たちもきちんと知識を持って話していかなければならないと思っています。私もフォーラムエネルギーを考える(ETT)の会議に出ると、原燃の新規制基準対応はどうなっているのかと聞かれます。きちんと内容を把握した上で、資料を用いて説明しています。ETTのメンバーの人たちはみんな理解していただけますが、一般の人たちには伝わりません。特に県内の人ではなく県外の人です。そういう点では私たちの立場からも、ちゃんとした答弁ができるようにしておきたいと思っています。地域会議の資料内容をいろいろと伺いましたが、参考にさせていただきます。
- (当社) どうしてもマスコミの見出しは、22回目のしゅん工延期となります。たしかに22回目の延期ですが、先ほどの挨拶でも申し上げましたように再処理の設備は昨年5月に、それまでの技術的課題を克服して完成しています。今回は新しい安全基準に適合しているかの審査に時間がかかっており、なんとしてもそれをクリアするためのしゅん工延期であり、技術的な課題があるが故のものではありません。そういう点についても、一層分かりやすい説明に努めてまいります。
- (委員) ETTの広報誌に、私はこう考える、こう思うというコーナーがあり、私に原稿依頼があって執筆しました。11月の中旬になれば発行されます。その内容についてお話をします。丸紅が佐賀に京セラが鹿児島に大規模な太陽光発電所を建設します。風力発電も1基1億かけて20年の寿命で能力は風次第、20年経ったらあれはどうなるのか、廃棄のほうは凄く心配です。太陽光のパネルにしても50年の電力供給ができると謳っていますが、50年後には、その廃棄物はどうなるのかということが、何の法令もないし企業も考えていないし、凄く心配になります。そういうことに関してもきちんとした方策を考えてほしい。MOX燃料を使用する大間は工事がストップしていますが、MOX燃料がいつどのように使われるのか、使われないのならどうなるのか、すごく心配です。そういうことも含めて私たちは正しい認識を持って直視していかなければならないということを、私は書きました。ホームページで見てください。
- (委員) 先ほど、説明いただいたリスクコミュニケーション活動についてですが、前回の会議において再処理工場内で高レベル廃液を貯蔵していることを、初めて伺いました。六ヶ所村民でも知らない人がいるのが現実です。私は、日本原燃と結構関わっているつもりでも知らなかったことなので。一般家庭の奥様方やあまり関わりのない男性でも、3.11の後に決まったことをきちんとやっていますという安心感を与えてほしい。きちんとお話することによって、二重、三重、五重くらい、これ以上はどうしようもないという対策を練っている

ことを村の方にも教えてあげたらどうか。安心するのではないかと  
思う。そういう意見を申し上げたところ、日本原燃でそれを取り上  
げていただき、全戸訪問の資料に反映されたということです。

(当 社) また全戸訪問があるので、その都度、アンケートなど皆さんのご意  
見を反映して資料を改善していきたいと思っています。

(当 社) 本日の資料にある全戸訪問の資料の記載は、3.11 直後に福島があ  
あなって、原燃の使用済燃料貯蔵プールは大丈夫なのかということ  
になり、そこにお応えするというので、急遽作った資料でありま  
す。今は、再処理工場の安全対策について現実に、とにかくこれだ  
けやっている、やろうとしていることを皆さまにお知らせしたい。  
その最初の機会は全戸訪問、全県的には毎月の新聞広告などで、積  
極的に発信していきたい。

(委 員) 全戸訪問について。よその地域は分からないのですが、私のいる地  
区だとバタバタと皆さん来られるし、聞くほうも聞く体制ではない  
状況なので、きちんと聞いていないと思います。こちらも来てもら  
っても、はいどうもと資料だけ置いていってもらう感じになる。も  
うちょっと何かの形で説明をする場があってもいいのではないかと  
思います。

(当 社) 具体的にはどんな場所が一番いいでしょうか。集まってもらう何か  
いいチャンスはありますか。

(委 員) 例えば説明会がありますでもいいし、場所は集会所でもいいと思  
います。

(委 員) 例えば自治会の総会の後とか。

(委 員) 原燃の人がお知らせしたくていらっしやっても、こちらが留守だっ  
たり、共働きだったりすると時間が合いません。説明していただく  
場があれば、こちらもしっかりと聞きます。

(委 員) 自治会長さんに5分とか10分頼んだら大丈夫ではないかと思う。

(当 社) 全戸訪問では、一人ひとりの方にお会いしたいという気持ちが強い  
ので、担当もいろいろ頭をひねってやっていますが、昼間にいる方、  
夕方以降にいる方、休日とかといったことも配慮しなければいけな  
いと思っています。今のご意見も参考にさせていただきます。

(委 員) 自治会の会員は日本原燃の社員も多いと思います。みんな集まって  
いるのでチャンスではないかと思えます。

(当 社) 私が福島第一の所長の時に、所長になってすぐ福島第一の原子力保  
守業務に関する隠ぺいやデータの改ざん等の不祥事が発生したわけ  
です。私は所長なので地元の方に呼ばれて、何をやっているんだと  
いろいろ言われました。私はこうします、現状はこうですと、自治  
会の場で時間をいただいて説明しました。その後も継続して自治会  
の後に、時間をいただいて、説明をしたり、議論したりして、親し  
くなりました。地元の方とのコミュニケーションの点では、それが  
一番効果的だったと思います。全戸訪問もしましたが、全戸訪問で  
は殆ど不在だったように思います。

- (委員) まず自治会の行事ということであれば日本原燃の社員は協力します。一方自治会もそういうことならば、協力しようとなるでしょう。お互いに助け合いの精神はありますから。
- (委員) 私が疑問を持っているのは、一つは新規制基準。この新規制基準というのは法的にはどういうものなのか。外部からの衝撃対策、竜巻とか火山がある。これはどういう想定をしているのか。例えば竜巻とあるが、恐らく重要な建物を防護して、直接建物にぶつからないというのを想定しているのだらうと思いますが、六ヶ所の施設のことを単純に考えて、飛んでくる物がどこにあるのかなど、まずこれが一点。あとはこの衝撃の対策というのは竜巻とか、言葉使いが悪いですが、テロ対策みたいなもの、例えばミサイルが飛んできた場合など、どういう対策をやろうとしているのかをお聞きしたい。
- (当社) まず、基準はどのようなものかという点、道路交通法と同じで法令になっています。原子炉等規制法の下部規定です。そういう形で主に施設の位置、構造、設備に関する規則というのがあって、そこに大体こういった中身が書かれているということです。
- (委員) 新規制というのは前のものに更に変わって、また強固なものにするということでしょうか。
- (当社) 整理して説明しますと、従来の基準では、原子力施設は事故が起こったときに災害防止上、周辺の住民に放射線の影響を与えない、それしか法律には書いていませんで、具体的なものは原子力安全委員会が、指針を出すこととしていました。現在の新規制基準では、従来の指針を基本的には踏襲していますが、それに「原子力規制委員会」による新たな要求を付け加えたもの、従来あるものに更に強化をしたものを規制側からの要求事項、許可の基準として強化したこと、それが一番大きな違いです。
- (委員) 我々地元の人間としては、いいのか悪いのかは分かりませんが、新規制基準が強固であり安全なものであることが確かであれば、安心して生活ができます。しゅん工が十何カ月も伸びたのも、対応のための時間が必要で、強固なものを作るために伸びたのであれば、止むを得ないというのが地元の立場です。そう考えていますが、本当にあと1年何カ月か後に完成するのでしょうか。それが疑問であり不安です。
- (当社) 審議そのものにも時間がかかり、また審議内容に対し、解析等も含め、当方が膨大な資料を準備するのにも時間を要します。言い過ぎかもしれませんが、最大限、徹夜、土日関係なく、努力するということもありえます。どのくらいの頻度で審議していただけるかですが、法令上は決められているものについても、どうしても規制委員会側による解釈の幅があります。例えば、竜巻で言えば、全国で見れば最大秒速100mといったものがあります。でも、こちらの地域ではどんなにさかのぼっても秒速69mが最大です。「地域性から言えば秒速69mで十分」と言いたいところですが、審議ではそう簡単には

いきません。こうした解釈上の議論があれこれあります。弊社としてやるべきことは最大限やりますが、審議の頻度や、一つの項目についてどれくらいやり取りがあるかによって時間が変わってきます。今回の見直し後のスケジュール案では、ある程度順調に審議していただくことを想定していますので、今後審議の回数が増えたり、新たな指摘があれば、スケジュールは非常に厳しくなります。審査後の工事の工程も9カ月を想定していますが、それも含めて1年5カ月で終わるよう努力してまいります。

(委員) ようやくガラス固化施設の運転が順調になってきたときに3.11の福島第一の事故が起き、再処理施設の運転は、試運転終了後5年止まっています。よく私にマスコミから取材があるが、「これだけ延期となっても、地元の商工業者は大丈夫か」「倒産する会社は出ないか」と聞かれます。先般のしゅん工延期の発表の際も、同様の質問を受けました。地元、商工業者の仲間は、「今は我々としても、見ているしかない。待っているしかない」という思いで、これまで5年なりを待ち続け、辛抱してくれているので、それなりに準備と心構えはしているはずだと思っています。だから「倒産は出ないだろう」と答えました。

(当社) ご指摘のように、再処理施設は実燃料を使った試験を2年近く実施し、化学的にウランとプルトニウムを分離して抽出するメインプロセスはうまくいったのですが、処理後の高レベル廃液をガラス固化する施設の運転がうまくいきませんでした。そのまま続けても、根本的な技術的問題があるだろうと思い、ガラス固化技術研究評価委員会でご指導いただき、基礎からやり直して2年間かかりました。その後再スタートしようとしたところ、震災が起きました。そういう意味で、施設についての技術的課題は克服してしまして、今残っていますのは、新規制基準への対応です。2014年1月にしゅん工時期を延期した際は、規制委員会が審査に最低6カ月要するだろうということで、電力各社とも6カ月と想定していたことから、当社も6カ月で提出しました。しかし、実際に審査を受ける中で、設計の強化・追加、重大事故への対応等、規制側の考えと我々の考えに大きなギャップがありました。その対応に時間を要したため、結果的に審査期間が伸びてしまいました。このためもう一度、我々自身が精査し、残りの工事規制庁の基準に合わせるためには、大きな改造工事も必要となってくるということで、1年半の延期としました。我々としては、今の時点では設計的なものはかなり固まってきたので、あとは規制庁と議論しながら判断を下していただけるように取り組み、1年半に収めたいと考えています。規制庁の考えを我々として全て掴んでいるわけではないため、様々なやり取りが想定されますが、1年半でなんとかしゅん工まで到達させたいと思っています。

地元に対する雇用については、再処理工場が止まっていると定期検

査もしなくてもいいのではないかと考えるかもしれませんが、我々としては、設備の安全を確保しなければなりませんし、地元企業にそれなりに仕事をしていただいております、発注させていただいています。我々を支えてくれるのは、地元企業です。特にしゅん工した後を支えてくれるのは地元企業なんです。我々としては、是非一緒になって我慢もしていただきながら、1年半を乗り切って次のステップにつなげていただきたいと思います。

(委員) 企業だけでなく、住民としても、「是非頑張ってもらいたい、支えてやる」という大きな母性本能のようなものがあります。

私は読書愛好会というサークルを20年やっており、原子力の勉強も長くやっていることから、今年5月30日に、東京から六ヶ所を発信する勉強会を開くこととし、六ヶ所から16人の会員が東京日本橋のホテルに赴きました。全体で100人程度集まりました。前に原燃に在籍した渡辺遥さんから「中国から見た日本の原子力事情」について説明をいただき、その後で私たちから、原燃が来る前の生活と来た後の生活、そして、規制委員会が動いた今の状況を、鼎談の形で発信しました。参加された方には非常に好評で、感動したという声もいただきました。10月5日には、同様の勉強会を仙台で50人超が集まり実施しました。このように、六ヶ所を理解してもらおうように活動しています。そして何よりも「私たちが六ヶ所に住んでいて、ちゃんと六ヶ所のものを食べて元気ですよ」ということを都会の皆さんに見せることが一番の安心の極みなのかなと思っています。こうした活動が奏功して、「六ヶ所の人には90歳を過ぎても元気だ。澁刺として活動的だ」と多くのお褒めの言葉をいただきました。他方では「同じ愛好会の会員の仲間が、東京の真ん中で六ヶ所を自慢して発言できることに感動した」と、会員同士が感動したということに、私が逆に感動しました。六ヶ所のイメージとしては、「暗い」「お金がなかった」「作物が取れない」といったイメージがつきまとっていました。私としては、どうしてもそれを払拭したかったので、「六ヶ所は元気で明るいと、放射線を正しく知れば安全だ」とつないでいければいいなという活動を実施しています。11月22日は、東通村の人たちと交流をし、情報交換して仲良くしていこうと活動する予定です。今問題になっている高レベル放射性廃棄物の最終処分地を探すための国の取組みも、地元のあり方として、私たち六ヶ所がいいモデルケースになるのではないかと思います。私はモデルケースになってもよいと思っています。そういう意味で、先ほどの委員のご発言のように、住民とうまく暮らす、住民をうまく助けてくれるといったいい感じになりたいと思います。

(委員) 規制委員会や、それに対する原燃の対応がどうかということを前面に出すのではなく、住民の方のご理解を得るために、繰り返し繰り返し、「再処理はどのような意味合いを持っているのか」など、どのように地域の方にご理解していただくかということ、丁寧にやっ

ていくことが重要ではないかと思えます。また、基本の安全とリスクマネジメントができていているということを前提に皆さんにご理解していただくという言い方をしないといけない。ある会議で東京に行って、原子力発電所の廃炉の関連の議論をした際に、「廃炉にすると皆さんはどのようなことをお考えか」と聞いてみました。「廃炉が決定されると、原子力発電所がその場でなくなると考えていませんか」と聞くと、「なぜなくならないのか」という回答が多く出ました。その時は「廃炉はこれから技術開発と人材育成で何十年かかる。そういう点を、大学等研究機関で進めている」と説明すると、「え、そうなんですか」というのが多くの方の意見でした。そういう現実から離れた認識を払拭しなければならないと思えます。併せて、この点は原子力発電所の運営者や原燃の関係の皆さんにも認識していただく必要があります。こうしたことが重要です。

(委員) 今回初めて地域会議に出席させていただいた。私は妻に誘われて六ヶ所村に来ました。来たときは何もなく、クエスチョンマークであったが、今は来てよかったと思う。皆さんすばらしい方ばかりです。

原燃には、人材育成等で大変お世話になっております。その意味では、原燃は村を育て、人材を育てていると思えます。しゅん工が2016年3月に延期となり、非常に残念です。先ほど説明していただいた中の、審査後の対策工事・使用前検査に関わる9カ月の意味について教えてほしい。

(当社) 使用前検査とは、ガラス固化設備の使用前検査であります。これ自体に丸9カ月要するとは考えていません。むしろ緊急遮断弁の設置工事に時間を要する。これが概ね9カ月かかり、その間に使用前検査を併せてできるという意味です。

(委員) これを「早く終わらせてほしい」ということは無理でしょうが、できれば計画通りに終わってほしいというのが私自身の切なる願いです。また、工藤社長が言うように、世界一安全な会社にしてもらえればと思えます。

(委員) 先日、六ヶ所村女性団体連絡協議会に招かれ、六ヶ所村の方々にお話させていただいた。久々に六ヶ所村に伺い、土田村長時代の六ヶ所村の地域づくりをどうしようかという懇談会があり、土田氏の「皆さんが集まるのは、大体仕事が終わってから」との意向で、夜に六ヶ所に通っていたことを思い出しました。その時から見ると、格段に六ヶ所村が元気になっています。また、女性の方から話をさせていただいて感動したことに、土田村長が掲げていたが、「函館ラ・サール、鹿児島ラ・サールのような学校を六ヶ所村に誘致したい」「世界中から学者が集まるのであればそういう人たちに胸を張って挨拶し、対話をする子供たちを育てたい」と仰っていた。その時代のある女性が、自分の息子をまず函館ラ・サールに入学させた。そして、六ヶ所村に掛け合い、奨学金を組んでもらったそうだ。その後順調に東京の大学に進学し、医師になった。しばらくの間は、恩返しと言

うことで青森県で医師をしていた。今は東京で医師をしている。もちろん奨学金は返済しているし、ふるさと納税で恩返しをしているということであった。六ヶ所村も日本のために苦渋の決断をして施設を受け入れたが、その傍ら、こうしたお金が教育にまわっているのかなど、非常にいい話だなと思っていました。

原子力規制委員会の安全の追求は、国民としては非常に喜ばしいことと受け止めています。一方、そもそも前提としていなかった重大事故の数々のために、安全の追求は必要であるものの、前回の地域会議で申し上げたように、施設が止まっていることにより、高レベル放射性廃液が液体のまま六ヶ所に置かれているという現実があります。きちんと安全対策はなされているが、こういう現実があるということは、規制委員会の皆さまもご承知だと思います。是非現場で、規制委員会の会議を1、2回開いていただき、「廃液は今このような状態で増えています」ということを、耳で聞くより現場で見ていただくこともとても必要なことではないかと思います。やはり現地現場主義であるべき。是非「地域会議からこうした要望が出た」といったことを国に申し出ることがあってもよかろうかと思いません。また、六ヶ所村の方々に懇切丁寧に説明する、オピニオンリーダーに機会を捉えて説明するといったことは必要ですが、やはり、新聞紙上、全面広告で、青森県を代表する三村知事と工藤社長の間で紙上対談をしていただければと思います。これまでオピニオンリーダーの方や、この地域会議の場からもいろいろな疑問や不安が出ているが、そういったものを取りまとめて、県知事から工藤社長に対し、「青森県民は実はこう考えている、こういう不安を持っている」ということを投げかけていただき、その内容を分かりやすく書いてもらえば良いと思う。地方紙は東京でもチェックしている。あらゆる関係省庁は新聞を見ているわけであるから、「今青森県民はこのように戸惑っているんだな」「現場では廃液が増えているんだな」と分かっていたらと思います。お金はかかることではあるが、新聞折込チラシよりも、県内全域をカバーしている新聞社の全面広告で、知事の口を通して県民の戸惑い、そして対処を求めているということも踏まえて話していただけたらと思います。お願いしたいのはそのところです。また、本当は国会議員や県会議員の口から規制委員会に対し、質問や要望をぶつけてもらうのが筋なのかもしれないが、難しいようであり、そうした前提から、こうしたことをご提案申し上げる次第です。

また、現地現場主義と申し上げたが、一つお願い、希望したい。皆さんは機会があって行かれたかもしれないが、福島第一原発周辺の視察の提案です。福島県にいる友人は多いが、なかなか福島第一原発周辺までは、立ち入れないし、遠くからでも眺める機会に恵まれないできた。こういう地域会議に関わっており、私自身地域づくりの会長も務めていることもあり、是非、先方にご迷惑でない時期に、

地域会議の委員の中でまだ訪れていない方、また賛同いただける方と視察できればという希望を持っています。よろしくお願いします。

(委員) 非常によいご提案だと思う。やはり原子力規制委員会の方々は、非常にトップレベルの専門家の集まりであり、原子力発電所、地層等、様々な専門家であるが、再処理や燃料の専門家は残念ながらいない。私の仲間が一人入っており、「材料については分かっていないんだよ」という話をしていた。したがって、是非、現場を知っていただくべく、かなり時間をとって丁寧にご覧いただくのがよいと思います。

青森県知事と工藤社長との対談については、どなたか、反対の立場の人ではなく理解していただけるための学識経験者に司会を務めてもらい、全面広告を出稿する。高レベル放射性廃棄物を一時貯蔵していますが、どこも最終処分地を引き受けていません。三村知事には青森県の実態を、地域に理解してもらうということのほうが重要であると盛んに申し上げています。福島原発は非常に大変で、私自身、関係者をよく知っているが、なぜあのような事故が起きたかについて、4つの事故報告書が出ている。北澤先生による民間事故調の分厚い報告書がある。北澤氏とは、専門が近く、米国時代からずっと親しかったが、つい先日亡くなられた。そういった事故調も、結局は、東京電力からデータが完全には出ていないため、中途半端に終わっています。原燃は、トラブルだけではなく、様々な情報を、難しくなく理解できるような形で発信していただくことが大切かと思います。そういう意味では、委員の方々に福島原発を視察すること、ということも重要なことだと思います。私自身、ずっと弘前大学に関与してきているが、被ばくに関する研究所を作ったときには、大きな非難があった。当時の学長が「万一のためだ」と言って作ったのであるが、万一が起きてしまった。事故が発生した際にすぐに福島に行き、2週おきに人員を送り出していた。それでも大変ということで、ついに福島市内にサテライトも作った。こうしたことを青森県の大学も一生懸命やってきた。八戸工大や八戸高専も、福島事故のかなり以前から原子力の人材育成事業を受けてきており、原燃にも受入れていただいている。人づくりと技術開発も、やはり地域の方々に理解をいただく活動として重要ではないかと思います。

(委員) 地域会議の目的は県民にこれだけ安全対策をやっているということ、この場を通じて説明することだったと思いますが、その作業は十分行っていると思います。ただ専門的なところは一般の方にはなかなか理解できないこともやむを得ないなと思います。しゅん工時期の延期について県民がどう考えているかですが、前回の地域会議でもあまりなんとも思っていないのではないかと回答しました。これは、地元六ヶ所の方やいろいろ関係している方は別なのだろうが、一般の方はしゅん工したことによって、自分にどういう影響があるかわからない。そういう認識なので延長されても特に関心がないということになります。

しゅん工することによって地域にこれだけの経済効果があるということであれば県民も知っておいていいと思います。今年私は青森県公社等経営委員会の委員となっています。22の公社の中に原燃さんが関わっている「むつ小川原地域産業振興財団」や「むつ小川原原燃興産(株)」があります。

むつ小川原原燃興産(株)の資料を見ると地元密着ということで立ち上がっています。かなりの経済規模で長年事業を行っています。それだけの経済効果があるということをお原燃さん自身から情報発信しにくいたらうが認識してもいいのではないですか。実際にしゅん工することによって経済波及効果が大きくなることを我々も知っておきたいと思います。

(委員) 原燃もしゅん工すれば経済波及効果は大きいと思います。青森県としては原燃と連携してやっていくことが重要であり、原燃の進出による雇用創出は大事です。私が八戸にいたころ地域の企業に対して日本原燃の再処理事業に、どういう風に協力できるか、どういう仕事があるかということをお、八戸と青森でマッチングを行い 200 社以上参加していただいた。当時は大学も八工大と八戸高専が出て、もしもそのための共同研究だったらこういうことができる、どういう人材を送り込むことができるとパネルでブースを作りました。これから慎重に事業を進めなければならないけれど、地元住民に理解をいただくためには、町・人・仕事ではないですが是非その辺を考えていただきたいです。

(当社) 目の前に新規制基準があり、日々対応しております。とにかく地域の方々に対する対応も、最近はお新規制基準で大変な状況にあることを中心にご説明していますが、今ご指摘いただいて、改めてその説明ばかりしていたと反省しています。そもそも私たちが立地した、経緯とか、地域に対する私たちの役割とか、そういう点まで地域の皆さまにご理解いただくべきというのは、ご指摘のとおりだなと思います。その辺を踏まえて今後の理解活動戦略をもう一回しっかり考えてまいります。

(委員) 青森県民は、原子燃料サイクルの仕事を引き受けているのだから、私は威張っていいと思います。誰も引き受けられないのだから今のところ。私も三村知事に青森のことを「知事だけが自信もって駄目だよ」と言っています。やっぱり県民みんなが理解してそして外に発信する。青森県出身者が東京・仙台に多くいるわけです。その人たちが自分の郷里青森県を自信を持って紹介できるか。原子力関連核燃料の再処理問題を理解して、青森出身だって。何だとか言われた時に、青森は頑張っています。そういうことを言える様に地道な活動も必要です。

(委員) 私は六ヶ所に来る前は相模原にいました。六ヶ所に来てよかったと思っています。日本経済が右肩上がりの状態の時、二度のオイルショックを経験しました。エネルギーというのは本当に大事だとその

時に思いました。そして石油を使わない原子力というのは大事だとその時に実感しました。今原子力発電はゼロですか。

- (当 社) 今はゼロです。
- (委 員) 今はゼロですね。それを思い出すと、皆さん、エネルギーの大切さ原子力の大切さを分かっているのかなと思います。
- (委 員) 東海村の原子力機構は新規制基準に対応困難で、再処理施設を廃止すると聞いていますが、これについてはどうでしょう。
- (当 社) そのように聞いております。
- (委 員) すると再処理施設は、六ヶ所村にしかないわけですね。
- (当 社) わが国ではここだけです。
- (当 社) 補足しますが、東海村ではガラス固化設備や廃棄物処理施設は残します。廃液もまだありますので。再処理工程前半のせん断と溶解については、技術移転が六ヶ所に十分なされたということでもなくなります。
- (委 員) なおさら、六ヶ所の施設は重大な責任を負うことになる。
- (当 社) 経緯は違うが、濃縮は、旧動燃・JAEA さんが人形峠で行っていましたが、動燃改革の流れの中で原燃に集中してということになりました。日本で濃縮の研究・製造・運転は六ヶ所が唯一となります。そして再処理も同様の流れということですよ。
- (当 社) イギリスのセラフィールドは 2018 年に止まるといっていますが、技術の宝庫であるので交流を深めていきたい。
- (委 員) リスクマネジメントを考えると、あるところに集中して、ただし集中すると規模が大きくなるのでしっかりと、二重、三重のリスクマネジメントをするべきだと思います。そういう点では人をどう育てるかだと思います。是非原子力発電所には動いて欲しいし、大間が動かないと原燃で行う MOX 燃料も立ち行かない。
- もんじゅも見学したことがあるが変なトラブルばかりで、フランスのフェニックス、ニューフェニックスも駄目になり、もんじゅは厳しい。私は、沸騰水型も加圧水型も中に入ったことがあります。比べると、加圧水型の上部は非常にすっきりしているんですね。沸騰水型は複雑ですよ。だけど東北電力東通は最新ですので、見学してみてこれは大丈夫と思いました。今後東通は更に安全対策が進みますので、しっかりと燃料の再処理に心がけることも相互の施設が一般にご理解していただく上で重要ではないかと思います。
- また、私が六ヶ所村の委員をしていたときに、六ヶ所村の村民を県外のいろいろな施設に連れて行くことがありました。六ヶ所村民は六ヶ所の施設を見たことがあるのかと聞いたらほとんどないということでした。私は外が悪いというわけではないが、ここの施設を村民に見せるほうが大事ではないでしょうか。
- (委 員) 出戸の断層はどうなっているのでしょうか。
- (当 社) もともと活断層ですが南北の長さ、南端部がどこまで再処理の敷地に近づいているかを調べています。レイクタウン近辺で調査をして

おります。断層に対して直角に大きな溝(トレンチ)を掘るという大規模な掘削をしました。断層があるかどうか見ているが、トレンチの辺りでは既に断層はありません。取りまとめて今月中にも報告したいと思います。

(委員) 御嶽山が噴火していろいろ議論があるが、是非いろいろな方に歴史学者含めて、八甲田山とかがどういうふうになり立っているか情報を入れていただきたい。

以 上